

## 一般演題 2 O2-06

### 第 1 種装置による減圧症の治療

○土居 浩<sup>1)</sup> 荒井好範<sup>1)</sup> 木村絵美<sup>2)</sup> 大畑雄太<sup>2)</sup>  
金井克好<sup>2)</sup> 高柴罔治<sup>2)</sup>

[1) 牧田総合病院 脳神経外科]  
[2) 牧田総合病院 臨床工学部]

#### 【はじめに】

最近のこの学会で 1 種装置の減圧症の治療の検討がなされてきたが、当院で治療した 37 例の減圧症に関して今回報告する。

#### 【対象】

令和 5 年 4 月から令和 7 年 3 月までに牧田総合病院で施行した 37 例を対象とした。

#### 【結果】

女性 15 例、男性 22 例で年齢は 25 歳から 81 歳であった。減圧症のタイプでは I 型が 17 例、II 型の内耳型 6 例、II 型脊髄型 8 例、II 型で息切れや全身倦怠感の症例が 6 例であった。海外発症で成田から来院した症例は 3 例。南部徳洲会病院で治療後の症例は 3 例。沖縄近辺での発症後帰京した症例が 7 例、秋田、四国で発症から帰京した症例は 1 例ずつ。その他は伊豆や館山など関東近辺での発症であった。今回の治療例で潜函病はなかった。入院例は脊髄型の 1 例でその他の症例は外来治療であった。治療回数は 18 例では 1 回の治療で改善し、これらはすべて米海軍 5 表での治療であった。II 型の内耳型や息切れなどの症例でも米海軍 5 表で治療を行った。2 例を除き治療回数も 1 回でほぼ完治した。脊髄型では 2 回以上施行し、当初は米海軍 6 表を用いたが、6 表は 1 回ないし 2 回でその後は 5 表での治療で改善した。また治療に関しては原則発症日か翌日の治療開始で行った。本人から直接の病院の電話もしくは DAN からの電話で当日もしくは翌日の治療であった。しかし一部の症例では発症後数日も散見された。

#### 【考案】

前任の病院では米海軍 6 表が主であったが、連絡後早期に加療を行ったためか、米海軍 5 表の治療の方が多かった。このことよりやはり減圧症治療は早期治療が重要と思われた。